

## 実践報告

# 感染管理スキルアップ研修における標準予防策の演習効果

邊木園幸, 栗原保子, 勝野絵梨奈, 武田千穂

### 【要旨】

医療関連感染の予防と管理に関する知識や技術を修得し、リーダーシップを発揮しながら実践できる看護職者の育成を目指して、講義・演習・自施設における感染対策課題の計画書作成および実践発表会から構成された「感染管理スキルアップ研修」を実施した。

本研究目的は、感染管理を推進する看護職者のリーダー育成を目指して構築した感染管理スキルアップ研修プログラムにおいて、標準予防策に焦点をあててその演習の効果を明らかにすることである。

対象者は「感染管理スキルアップ研修」を受講し、本研究への参加を承諾した受講生で、データ収集方法は、受講日毎に、無記名によるアンケートを実施した。内容は、項目ごとに研修直後の「理解度」および研修3か月後の「実践度」について5から6段階リッカートスケール法を用いて調査し、研修に対する感想・意見は自由記述とした。研修プログラム終了2か月後に「実践活用度調査」を実施した。分析方法は、「理解度」「実践度」の2項目については得点化し集計した。自由記述内容については、質的記述内容分析を行った。回答数は、研修直後は31人(97%)、研修3か月後は29人(90.1%)であった。

研修会の内容について、研修直後の理解度、研修3か月後に実践度の2項目の結果を得点集計し平均得点を算出した。標準予防策に関する理解度の平均得点は4.94、実践度は4.66であり、いずれも最も高得点であった。自由記述の分析では、【自己の手洗いの問題点を自覚】【標準予防策に関する知識の再確認と深まり】【見えてきた自己および所属施設の問題点】【院内教育への示唆】【実践への困難感】【感染対策に関するコストの問題】という6つのカテゴリーが抽出された。

以上のことから、標準予防策に関する演習は、「理解度」「実践度」ともに平均得点が高く、受講生にとって知識と技術が結びつき自施設の現状を振り返るきっかけや実践課題を見出すことにつながり、研修後の実践に活かされていることが明らかとなった。

### 【キーワード】 標準予防策, 演習, 感染管理, 理解度, 実践度

## I はじめに

院内感染の防止対策については、2007年の第5次医療法改正において無床診療所も含めたすべての医療機関に院内感染防止対策が義務付けられた。さらに2011年には「医療機関における院内感染対策について」(医政指発0617第1号厚生労働省医政局指導課長通知)によって院内感染対策の留意事項が提示

され、その遵守が求められた。感染予防および対策を実践していく上で重要なことは、感染防止対策の理解と現場での継続した実践である。その中でも標準予防策は、感染症の有無にかかわらず、医療が提供されるあらゆる環境において、すべての人に標準的に実施されるべき感染予防策の総称のことであり、医療施設のすべての場所やケア場面において不可欠

であり、実践のための教育が必要である。前田ら<sup>1)</sup>は、耐性菌を拡げないために標準予防策の遵守が基本であるが、看護師によって標準予防策の理解や実践に差があること、小規模施設では標準予防策に対する効果的な教育の難しい実態を報告していた。南家ら<sup>2)</sup>も、無床診療所では耐性菌に関する医療者の知識不足や標準予防策の概念が十分に浸透していないことを指摘していた。一方で、標準予防策の遵守状況について自己チェック表を用いて定期的に調査した結果、遵守率が向上したこと<sup>3)</sup>や看護ケア場面設定におけるシュミレーション教育によって標準予防策の遵守率が上がったこと<sup>4)</sup>が報告されていた。手指衛生の遵守率向上を目指した取組では、直接観察法を用いたサーベイランス、個別指導等によって遵守率が上昇したこと<sup>5)</sup>や、手指消毒薬使用回数のサーベイランス及びフィードバック、学習会等の開催により手指消毒薬の使用回数が増加した<sup>6)</sup>など複数報告されていた。これらの先行研究から、医療機関において標準予防策に関する教育に取り組んでいるが、実践につながる教育に苦慮していること、施設間で教育に差があることが推察された。

そのため、看護職者が医療関連感染の予防と管理に関する知識や技術を修得し、リーダーシップを発揮しながら実践できることを目指して、武田らの意識調査<sup>7)</sup>をふまえて教育プログラムを作成し、平成25年度から「感染管理スキルアップ研修」を開始した。この研修プログラムは、感染管理において必要な教育要素を、専門職者育成として日本看護協会が示す認定看護師教育課程基準カリキュラムをもとに、感染管理を推進するリーダー育成に必要と思われる項目を抽出して構成した。初年度の研修の他者評価を通して、研修生は標準予防策に関する基礎的な理解は深まっているが、手技においては個人防護具を脱ぐ際に清潔と汚染の境界域への意識が低くなるなど修得段階の低さが浮き彫りになった。この課題を解決するために平成26年度の研修では、特に標準予防策に関して知識に基づく実践が現場で行えるように、実技演習と評価シートに基づく相互評価方式を導入

し強化に取り組んだ。

そこで、この研修プログラムのうち標準予防策に関する演習の効果を明らかにするために本研究に着手した。

## II 研究目的

感染管理を推進する看護職者のリーダー育成を目指して構築した感染管理スキルアップ研修プログラムにおいて、標準予防策に焦点をあててその演習の効果を明らかにする。

## III 研究方法

### 1. 対象者

平成26年度宮崎県立看護大学地域貢献等研究推進事業「感染管理スキルアップ研修」を受講し、本研究への参加を承諾した受講生。

### 2. データ収集期間

平成26年7月～平成27年1月

### 3. データ収集方法

感染管理スキルアップ研修を受講毎に、無記名によるアンケートを全日程7回の22項目について実施した。内容は、項目ごとに研修直後の「理解度」について5段階リッカートスケール法「1.理解しにくかった 2.やや理解しにくかった 3.どちらでもない 4.やや理解しやすかった 5.理解しやすかった」を用いた。研修直後の研修に対する感想・意見は自由記述とした。

研修6回目終了後から3か月間の「実践度」について、研修7回目終了後に6段階リッカートスケール法「0.該当なし 1.実践に活かしていない 2.あまり実践に活かしていない 3.どちらでもない 4.やや実践に活かしている 5.実践に活かしている」を用いて調査した。

研修プログラムの全日程終了2か月後に郵送法による「実践活用度調査」を実施した。研修での学びを実践に活かしたかについて、「はい」「いいえ」の2項選択法で問い、「はい」と答えた場合に、実践に活かした内容を18項目から複数回答を求めた。

さらに、所属施設において感染対策上、優先度の高い取組について18項目の中から5項目選択し優先順位の記載を求めた。

#### 4. 分析方法

- 1) 研修内容の22項目に対する「理解度」と「実践度」について、参加者の平均得点を算出し、研修項目間の比較を行った。
- 2) 研修に対する感想・意見の自由記述内容については、演習の効果に注目して文脈ごとに意味を読み取り、短文に構成しコードとした。これらのコードの意味内容の共通性・相違性吟味し特徴を取り出し、第1段階をサブカテゴリー、最終コードをカテゴリーとして表現した。
- 3) 研修プログラム終了2か月後の2項選択法および内容は単純集計した。

#### 5. 研修の概要

研修の参加条件は、チームリーダーとして自施設の医療関連感染の予防と管理に貢献できることを目

指していることから、看護職としての実務経験5年以上で県内の医療機関でリンクナースとして活動している、もしくはその任にあたる予定であることとした。さらに、看護部門の責任者から推薦を受け、すべての研修日程に参加できることとした。

プログラムは、感染管理のための基礎知識に関する講義6項目、各論講義13項目、演習3項目として標準予防策、所属施設における感染対策課題の計画書作成、課題の実践発表会の合計22項目で構成した(表1)。

1週間に1～2日ずつ5週間にわたって研修プログラムの21項目を実施した。表1に示すようにサーベイランスの基礎編を終了した後に、所属施設の感染管理上の課題を分析し、課題解決に向けた計画を立案する演習を行った。その後、所属施設で3ヶ月間の実践を行い、そのプロセスと成果を報告する発表会を開催した。

標準予防策の演習は180分で、標準予防策に関する基礎的な講義を30分程度実施した後、手指衛生前

表1 感染管理スキルアップ研修概要

回 (開催月)	研修内容		時間数 (分)
1回 (6月)	感染管理のための基礎知識Ⅰ	(1) 感染症—易感染について—	90
		(2) 微生物概論	90
		(3) 感染症—病院感染をおこしやすい微生物—	90
2回 (7月)	感染管理のための基礎知識Ⅱ	(4) エビデンスに基づく感染予防	90
		(5) 感染管理組織・診療報酬・関係法規など	90
		(6) 感染管理における看護の専門性	90
3回 (7月)	標準予防策&演習Ⅰ	(7) 標準予防策(手指消毒・PPE装着等の演習も含む)	180
	感染経路別予防策Ⅰ	(8) 接触感染予防策(MRSAについて)	120
		(9) 接触感染予防策(感染性胃腸炎について)	
	演習にむけてのガイダンス		60
4回 (7月)	感染経路別予防策Ⅱ	(10) 飛沫感染予防策(インフルエンザについて)	90
	職業感染防止策	(11) 空気感染予防策(結核について)	90
	洗浄・消毒・滅菌	(12) 職業感染防止策(ウイルス感染症・針刺し切創予防)	90
	感染防止技術Ⅰ	(13) 洗浄・消毒・滅菌	90
5回 (7月)	感染防止技術Ⅱ	(14) 人工呼吸器関連肺炎(VAP)予防策	90
		(15) 膀胱内留置カテーテル関連尿路感染(UTI)予防策	90
	部門別感染防止策	(16) 中心静脈カテーテル関連血流感染(CR-BSI)予防策	100
		(17) 手術部位関連感染(SSI)予防策	
		(18) 透析室における感染防止策	
サーベイランス	(19) 内視鏡室における感染防止策	90	
	(20) サーベイランスとは(基礎編)	90	
6回 (7月)	演習Ⅱ	(21) 課題の計画書作成	終日
7回 (11月)	演習Ⅲ	(22) 課題の計画・実施・評価発表会	終日

後における手指の汚染状況について手洗いトレーニングボックスを活用して確認した。その後、講師がエプロン、ガウン、マスク、ゴーグル等の个人防护具personal protective equipment（以下PPEとする）の着脱ポイントをデモンストレーション形式で実施し、受講生はPPEの着脱の実技演習を行った。そして、受講生はグループ内で二人一組となり手指衛生及びPPE着脱を行い、その実践に関するポイントが明記されている評価シートにもとづいて相互チェックを行った。また、オムツ交換時の手指衛生と手袋着脱のタイミングについて、グループワークを通してシミュレーションする演習を実施した。

## 6. 倫理的配慮

対象者に対し、研究の目的と意義、研究への参加は自由意思であること及び匿名性の確保を含めた倫理的配慮について、研究協力依頼文書及び研究に関与していない第三者が口頭で説明した。そして、回収箱への提出および郵送による返信をもって承諾を得たとした。なお、本研究は宮崎県立看護大学研究倫理委員会の承認を得ている。（承認番号：平成26年度第1号）

## IV 結果

研修参加者は定員20人に対して32人の応募があり、研修の展開方法を工夫することで申込者全員を受講者とした。

### 1. 演習の評価

回答数は、研修直後は31人（97%）、研修3か月後は29人（90.1%）であった。

研修会の内容に関しては、「講義・演習は理解しやすかったか」について5段階リッカートスケール法を用いて研修直後にデータ収集した。研修6回目終了後から3か月間の実践に関しては、「実践に活かしているか」について、研修7回目終了後に6段階リッカートスケール法を用いてデータ収集した。理解度については「1. 理解しにくかった～5. 理解しやすかった」、実践度については「0. 該当なし、1. 活かしていない～5. 活かしている」とし、その結果を得点集計し平均得点を算出した。参加者の『標準予防策』項目に関する「理解度」の平均得点は4.94、「実践度」は4.66であった。

全22項目における「理解度」の平均得点を算出す

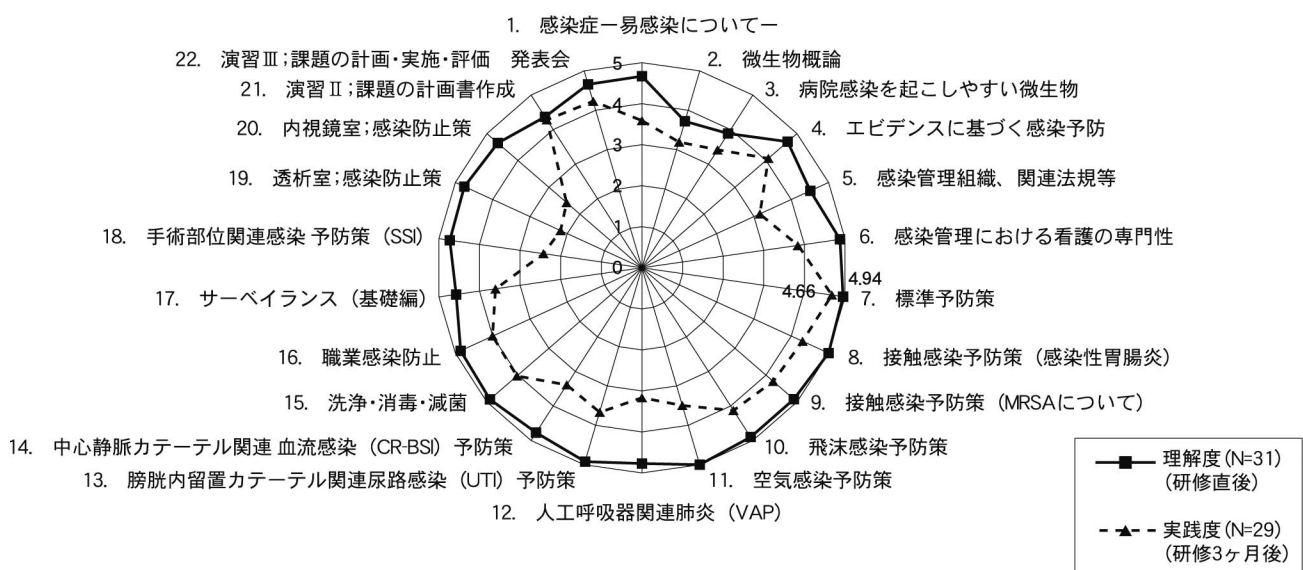


図1 研修直後の理解度と研修3か月後の実践度

ると4.69 (SD1.13) , 「実践度」は3.62 (SD1.03) であり, 標準予防策の各平均得点は22項目中でいずれも最も高得点であった。プログラムの22項目ごとの結果を図1に示す。

## 2. 標準予防策の演習について, 研修直後の自由記述

研修直後の自由記述内容は, 演習の効果に注目して精読し, ひとつのまとまりをもった意味ごとに区切って短文に構成した結果, 27コードに整理された。これらから12のサブカテゴリー, 6カテゴリーが抽出された。以下に, その過程の一部を示す。その際, コードは「 」, サブカテゴリーは〈 〉, カテゴリーは【 】として表す。

「装着時のポイントを初めて意識した」「無意識にやっていたことに根拠があった」など4つのコードからは, 〈根拠がわかり, これまでの間違い等を自覚〉を抽出した。また, 「手指衛生のタイミングやPPEの装着の必要性が理解できた」「PPE装着, 手指衛生の必要性を再確認した」からは〈標準予防策の必要性を再確認〉を抽出した。この他3つのコードから〈標準予防策の基本を再確認〉〈感染拡大防止のための考え方を理解〉を抽出し, これら4つのサブカテゴリーから, 【標準予防策に関する知識の再確認と深まり】を抽出した。その他のコードも同様に分析し, 【自己の手洗いの問題点を自覚】【見

表2 研修直後の演習の効果

カテゴリー	サブカテゴリー	コード
自己の手洗いの問題点を自覚	グリッターバッグを使用し, 洗い残しを確認	グリッターバッグを初めて使用し, 洗い残しがあることがわかった。
		グリッターバッグを利用し, 手洗い残しを再確認した。
		手洗いでは本当に汚れが残っていることを実感した。
標準予防策に関する知識の再確認と深まり	標準予防策の基本を再確認	爪と指間の洗い残しを再確認した。
	標準予防策の必要性を再確認	日頃のPPE着脱の見直しができた。
		基本を再確認した。
	根拠がわかり, これまでの間違い等を自覚	手指衛生のタイミングやPPEの装着の必要性が理解できた。
		PPE装着・手指衛生の必要性を再確認した。
		装着時のポイントを初めて意識した。
これまでの方法が間違っていたことに気づいた。		
感染拡大防止のための考え方を理解	無意識にやっていたことに根拠があった。	
	PPE装着では, 意識していなかったところが汚染していたことに気づいた。	
院内教育への示唆	スタッフ教育への活用	感染症(ウイルス感染)患者発生時の, 感染拡大防止のため実際にやる演習は, 理解しやすく考え方がわかった。
		実際にPPEを装着することで, 自施設でもやってみようと思った。
		スタッフにPPE着脱方法の指導やチェックを行いたい。
	スタッフ教育に役立てられる。	
指導のポイントを理解	標準予防策は定期的な研修が必要。	
見えてきた自己および所属施設の問題点	標準予防策が適切に実施されていない自施設の現状	指導のポイントがわかった。
		業務の忙しさを理由に手指衛生が不十分であったことに気づいた。
		自施設のPPEを適切に使用していない現状に気づいた。
	演習を通して自己の実践を再確認	PPEの着脱を実際に体験し, スタッフ指導の必要性を実感した。
院内研修が役立ち, PPE着脱が定着	自施設では手指消毒のタイミングができていないことがわかった。	
実践への困難感	標準予防策の理解と, 実際の手指衛生実施の難しさ	これまでPPEの装着, 手指衛生はやっているつもりであったが, 演習をやってみて確実にできているか自信がなくなった。
		正しいPPE着脱ができていたことを再確認し, 日頃の院内研修が役立っていることがわかった。
感染対策に関するコストの問題	コストの問題から, PPEを適切に使用していない現状	演習は参考になったが, 現場でのオムツ交換中に, 手指消毒を何度も行うのは難しい。
		オムツ交換時のエプロン装着は, コストを理由にオムツ交換が必要な患者全員に行えていない問題があり, 今後検討が必要。
		PPEの活用は, コストの関係で使っていないことが多い。

への示唆】【実践への困難感】【感染対策に関するコストの問題】という6つのカテゴリーが抽出された(表2)。

### 3. 研修全プログラム終了2か月後の実践活用度調査

研修全プログラム終了2か月後の実践活用度調査では、11人(34.4%)から回答が得られ、全員が研修での学びを実践に活かせたと回答していた。研修全プログラム終了後に実践に活かした項目は、手指衛生・個人防護具が最も高く、所属施設で優先度の高い取組みは、標準予防策と手指衛生・個人防護具、感染対策委員や感染対策チームの活動であった(図2)。

## V 考察

本調査から標準予防策に関する演習は、理解度の平均得点が高く、研修3ヶ月後の実践度においても

平均得点が22項目の中で最も高かったことから、受講生にとって満足度が高く、研修後の実践にもつながっていたと言える。これは、医療機関の特徴に関係なく標準予防策の実施がすべての医療機関に求められている感染対策であるためと考えられる。研修項目は、感染対策を推進するリーダー育成に必要と思われる項目を抽出して構成したが、医療機関によっては該当しない項目等も含まれていたことから、透析室と内視鏡室の感染防止技術や手術部位関連感染予防策の実践度の平均得点が特に低い結果となったと思われる。

武田ら<sup>7)</sup>は、感染管理に関する研修を受講した看護職者の多くが感染対策の基本となる標準予防策や感染経路別予防策を理解し、重要であるという認識のもとに実践していることを明らかにしていた。一方で研修後の意識の変化において、標準予防策や感

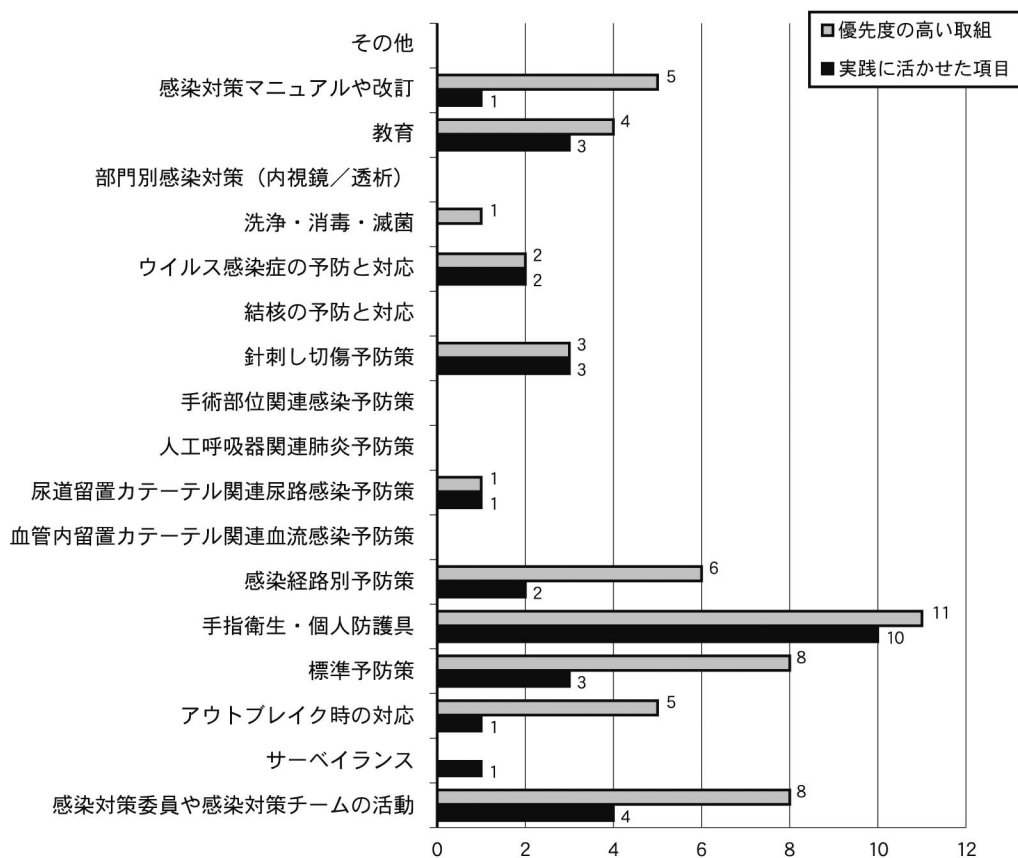


図2 研修プログラム終了後、実践に活かした項目と自施設において優先度の高い取組(N=11、複数回答)



染経路別予防策が重要であると意識が高まっているにもかかわらず、理解度と実践度、および重要度と実践度は必ずしも一致していない項目があることを明らかにしていた。本研修では、専門知識を学ぶだけでなく、研修で得た知識が実践につながるように感染対策の中で重要な標準予防策に関する実技演習をプログラムした。実技演習は標準予防策の原則と手指衛生とPPE着脱の実践上のポイントを修得できるように、相互チェックを取り入れた。相互チェックは、手指衛生とPPE着脱時の原則と技術のポイントを明記した評価シートに基づいて、研修生同志の自己評価と他者評価のつき合わせを行った。このことによって、「装着時のポイントを初めて意識した」「無意識にやっていたことに根拠があった」などのコードに示されるような自由記述の記載が得られたと考える。相互チェックを通して、日常の自己のPPE着脱の様子を思い出し、無意識の行為だからこそ自己評価では気づかず他者から指摘されることによって学びが深まっていると考えられる。これは、一方向の講義だけでなく標準予防策の実技演習と評価シートを活用した相互評価を取り入れた成果だと考える。

研修直後の演習効果として抽出された【自己の手洗いの問題点を自覚】【標準予防策に関する知識の再確認と深まり】に示されるように、標準予防策に関する演習は、受講生が自己の知識とその内容の不確かさに気づいたり、根拠を再確認することにつながっていると考えられた。中でも、手指衛生に関する演習については、初めて手洗いトレーニングボックスを使用して洗い残しを確認した受講生、院内研修で体験済みの受講生など背景は様々であったが、自分の手指衛生の結果として洗い残しがあることを再確認していた。この気づきが手指衛生の必要性を再認識することにつながっていると考えられた。佐藤ら<sup>8)</sup>は、感染予防に関する知識や汚染の実感を有している認識内容は適切な感染予防行為につながると述べ、さらに、目に見えない微生物による汚染を実感できるようになることが、適切な感染予防行為

につながる認識を形成する上で必要なことであることを明らかにしていた。このように、感染予防行動は目に見えない細菌やウイルスを意識して行動することが求められることから、汚染を可視化することはイメージが広がり、実践につながると推察された。さらに大須賀<sup>9)</sup>は、手洗い行動に影響していた因子は忙しさ・教育・経験であることを明らかにしており、手洗い行動を改善するために、忙しさの改善、手指衛生のトレーニング、院内教育の充実を提案していた。本調査においても【実践への困難感】を感じていたことから、今後は演習展開を工夫し、所属施設に合わせたベストプラクティス作成などの教育方法を主体的に導き出せるようにしていくことが課題である。

PPEの使用は、昨今のノロウイルス感染対策等で必要性が強く推奨されていることから、多くの病院では危機管理意識が高く日常の看護ケアにおいて使用されていると推測される。一方で療養型病床や介護施設等では経費削減が優先され、PPEを使いたくても使えない組織風土や使用できる環境が整っていないことが推測される。前田ら<sup>1)</sup>は、看護師によって知識や関心の差が大きく、標準予防策や個人防護具の使用に対する理解不足や感染予防よりも経費抑制が優先されているために個人防護具の使用が不確実であることを明らかにしていた。研修直後の演習効果からも【感染対策に関するコストの問題】が抽出されたことで、組織内の厳しい現状がうかがえた。綾部ら<sup>10)</sup>は、MRSAのアウトブレイクをきっかけに病棟の感染対策を見直し、MRSAを検出したケースの包帯交換時の手指衛生とPPEの使用に関する取決めを行い、接触感染予防策を徹底した。同時に全入院患者に対する標準予防策の徹底を医療従事者全員で取り組み、アウトブレイクの終息にいたったことを報告していた。このことから、PPEの適切な使用は、医療関連感染の予防および管理に不可欠であり、施設管理者ならびに職員の理解を求めていく必要があると考える。また、今回の分析を通して、【見えてきた自己および所属施設の問題点】が抽出されたことから、問題意識を持ち始めた受講生もいるといえる。

受講生が各所属施設で、問題解決に向けて関係者の協力を得ながら、早期に取り組んでいく事が望まれる。境ら<sup>11)</sup>は小規模病院、診療所における感染対策の現状として、年2回の職員研修に職員全員が参加できている割合は、調査施設の半数であること、手指衛生環境や個人防護具はほとんどの施設で整備されているが、マスク・エプロンの使用状況が低いことを明らかにしていた。また、川村ら<sup>12)</sup>は、感染制御部門のスタッフによる週1回の病棟ラウンドの問題点として、手指衛生実施や個人防護具など指摘した事項に必ずしも改善がみられず、同一内容を再度指摘することが多いことを報告していた。これらの報告から、標準予防策を遵守できる環境を整備してもそれを実施する職員の意識が変化しなければ、効果的な感染対策につながらないことになり、職員教育が重要となる。

今回の研修参加条件は、施設での感染予防・管理におけるチームリーダー育成をめざしていたことから看護師の実務経験5年以上とした。その結果、経験豊かな受講生が参加し、現場において指導する立場の人もいた。そのため、演習内容について「スタッフ教育に活用したい」との意見があり、【院内教育への示唆】を得て具体的な活動をイメージしていることが推察された。

さらに、「感染症発生時の感染拡大防止のための実際に行う演習は、理解しやすく考え方がわかった」に示されるように、具体的な事例展開は、現場の状況を想起し対応を考えることで、所属施設に引きつけて具体策を検討することにつながっていると考えられた。山内ら<sup>13)</sup>は、院内感染対策において「イメージーションを高める教育」を行うことにより、得た知識を「生きた知識」として実践的な感染制御対策に役立てることが可能と仮説を立て、研修を実施した。その結果、個々の感染制御イメージーションの広がりや得点数の増加として評価できたことを報告していた。さらに、感染制御に関するイメージーションを高めることは、所属施設の現場に適した感染対策のあり方を再考する契機となることを示して

いた。このことから、知識と実践を結びつけるために演習は必要であり、その演習内容は、本研修のプログラムのように具体的な技術演習、事例展開、所属施設の課題を明らかにし、その解決に向けて取り組み、発表するという構成は理解度と実践度を高めるために効果的であったと考える。

## VI 結論

標準予防策に関する演習は、「理解度」「実践度」ともに平均得点が高く、受講生にとって知識と技術が結びつき自施設の現状を振り返るきっかけや実践課題を見出すことにつながっていた。そして、研修後の実践に標準予防策が活かされていることが明らかとなった。



## 引用文献

- 1) 前田ひとみ, 矢野久子, 南家貴美代, 他 (2013) : 地域における薬剤耐性菌拡大防止対策の実現に向けて看護職が取り組むべき課題 (第1報), 日本看護科学会誌, 33(3), 46-55.
- 2) 南家貴美代, 前田ひとみ, 藤本陽子, 他 (2012) : ある地域の医療施設における感染管理の課題と看護師による感染管理ネットワークへのニーズ調査, 環境感染誌, 27(3), 206-214.
- 3) 平原由美子, 加藤はるか, 月野トシ子 (2012) : 「標準予防策」の遵守に関する取り組み—全職員の自己チェック3年間の変化とその成果—, 第42回日本看護学会論文集看護総合, 74-77.
- 4) 稲垣ふくみ, 倉地雅恵, 洲上奈々, 他 (2012) : スタンダードプリコーション遵守に向けたシュミレーション教育の効果, 第42回日本看護学会論文集看護総合, 81-84.
- 5) 鈴木さつき, 村田弘美 (2014) : 直接観察法を用いた手指衛生と手袋着脱のタイミングの遵守率上昇に向けた取り組み, 環境感染誌, 29(4), 273-279.
- 6) 松沢麻里, 西川裕美, 伊藤俊次, 他 (2014) : 手指衛生の遵守向上に向けた取り組み—手指衛生5つのタイミングに焦点を当てた介入効果—, 第44回日本看護学会論文集看護総合, 266-269.
- 7) 武田千穂, 栗原保子, 勝野絵梨奈, 他 (2014) : 地域における看護職者のための感染対策教育プログラムの検討—感染管理基礎講習会を受講した看護職者の感染対策に対する意識調査より—, 宮崎県立看護大学看護研究・研修センター事業年報, 3, 3-10.
- 8) 佐藤淑子, 林滋子 (2008) : 看護師の感染予防行為を導く認識の形成に向けて—手洗いと防護具の着用に関する調査から—, 日本感染看護学会誌, 5(1), 27-35.
- 9) 大須賀ゆか (2005) : 看護師の手洗い行動に関係する因子の検討, 日本看護科学会誌, 25(1), 3-12.
- 10) 綾部貴典, 西村征憲, 幸森千晶, 他 (2013) : メチシリン耐性黄色ブドウ球菌 (MRSA) アウトブレイク時の感染対策とチーム医療, 宮崎医学会誌, 37, 187-194.
- 11) 境美代子, 長谷奈緒美, 吉井美穂 (2010) : 小規模病院, 診療所における感染対策の現状—改正医療法後における感染管理体制の実施調査より—, 環境感染誌, 25(5), 295-301.
- 12) 川村英樹, 折田美千代, 中川彩, 他 (2013) : 大病院でのICT病棟ラウンドにおける指摘事項の解析, 環境感染誌, 28(1), 25-28.
- 13) 山内勇人, 河野恵, 戸村美名子, 他 (2008) : 「感染制御イメージーション」研修会の有用性, 環境感染誌, 23(2), 155-159.

## Activity Report

### The Effectiveness of Training for Standard Precaution in an Infection Control Workshop

Miyuki Hekizono, Yasuko Kurihara, Erina Katsuno, Chiho Takeda

【Key words】 standard precaution, training, infection control, comprehension, practice